今なお息づく〝水と緑と文化のまち〟への思い

倉吉市では、倉吉市民、または倉吉市に特にゆかりが深く、公共の福祉を増進したり社会文化の進展に寄与したりして、その功績が卓絶で市民の尊敬の的と仰がれる人に対し、「倉吉市名誉市民」の称号を贈り、その功労に報いるとともに、後世までその功績を顕彰するよう条例で定めています。

これまで、キリンビールの社長や会長を歴任した磯野長蔵さん(故人)をはじめ、7人にこの称号を贈り、顕彰しています。

平成23年10月26日(水)に開催された倉吉市議会臨時会において、7月に亡くなった元市長の牧田實夫さんを名誉市民とすることが承認されました。そして、12月定例市議会の初日となる12月5日(月)、議場において、石田市長よりご遺族に称号が贈られました。

いまなお、その精神が倉吉に息づく〝水と緑と文化のまちづくり〟を市政の目標に掲げて、郷土を愛し続けた牧田さんとはどのような人だったのかを追いました。

牧田實夫(じつお)さん(故人)が倉吉市名誉市民に

緑の彫刻プロムナードにある「To The Sky」(澄川喜一／平成３年)

牧田 實夫さん（大正８年生まれ。享年９１歳）

１２月５日（月）の名誉市民章授与式に臨んだ息子の牧田泰博さんは、「家族として大変名誉なこととうれしく思い、市民の皆さまに心から感謝しています。こうして名誉市民の称号をいただき、父は偉大な人だったのだと改めて認識しているところです。自分たち家族も今後倉吉市のために何ができるのか考えていきたいと思います」と感想を述べました。

「父は、いつも、『苦労を楽しむ』と言い、信条としていました。私には大変厳しい父親でしたが、孫を可愛がる『いいおじいちゃん』でした」

生涯、愛する故郷 倉吉の振興に尽力

市長としての功績

総合開発計画の推進

昭和57年に第三代の倉吉市長に就任。２期８年の間、昭和58年には、市制施行30周年を契機として「水と緑と文化のまちづくり」を市政の目標に掲げ、地域住民が主体となり、二十一世紀へ向けた活力と個性あるまちづくりを推進しました。

わかとり国体の開催

昭和60年の第40回国民体育大会（わかとり国体）の開催においては、人口５万の小都市ながら５つの種目を引き受け、自転車競技場とラグビー場を新設し、野球場と庭球場を改修しました。これらの施設は、現在でも市民の生涯学習の場として大きく貢献しています。

この国体を機に、昭和61年には第１回くらよし女子駅伝競走大会が開催され、現在では駅伝シーズンの始まりを告げる大会となっています。全国から多くの強豪校が集結し、全国高校女子駅伝へとつながる大会として注目されています。

教育文化の振興

旧国鉄倉吉線が廃止になった昭和60年３月以降は、意義ある跡地利用を検討し、全国で初めて「緑の彫刻プロムナード」を整備。緑と彫刻の調和のとれた散歩道として、現在でも市民の憩いの空間となっています。

あわせて文化面でも「倉吉：緑の彫刻賞」、「前田寛治大賞」、「菅楯彦大賞」の３大賞制度を創設し、トリエンナーレ方式により３年間でそれぞれの特別展を開催することで、郷土作家の顕彰と地方文化の振興に尽くしました。

観光振興と市民活動の推進

「トイレからのまちづくり」として全国でも注目を浴びた日本一の公共トイレづくりでは、数々の賞を受賞しました。

市民運動の推進でも、「水と緑と文化のまちづくり協議会」を結成し、「森の感謝祭」、「市民ふれあいの広場」、「市民健康大会」に加え、春には「倉吉春まつり」、夏には「倉吉打吹まつり」、秋には「緑のフェスティバル」、そして冬には「風のまつり」と、四季折々のイベントを次々に提唱、成功に導き、市民自らが作り、参加するまちづくりの礎を築きました。

市長退任後も、まちづくりに尽力

平成２年、倉吉市長退任後は、倉吉文化団体協議会の会長として倉吉文化の振興に寄与し、生涯、愛する倉吉の振興に努めました。

牧田實夫さんの思い出

倉吉博物館
根鈴 輝雄館長

文化を育み、愛することに力を尽くす

倉吉といえば、今でも多くの人にとって「水と緑と文化のまち」というイメージなのではないでしょうか。

その象徴ともいえる「倉吉：緑の彫刻賞」、「前田寛治大賞」、「菅楯彦大賞」という倉吉博物館のトリエンナーレ美術賞は、牧田さんの発案で始まりました。

「倉吉：緑の彫刻賞」が始まる昭和62年より2、3年前、公務で訪れた北海道旭川市の野外彫刻を見て、「これを倉吉でもできないか」と考えたのがきっかけだったと聞いたことがあります。

牧田さんは、芸術文化にしても、「トイレ」のような生活文化にしても、文化の醸成こそがまちに潤いを与えるという信念を明確に持っておられました。ですから、まちの中に、環境にマッチした優れた彫刻作品を設置するというのは、自分が信じるまちづくりにぴったりだと考えられたのだと思います。ちょうど、旧国鉄倉吉線が廃止となり、その跡地利用が市民の間で取り沙汰されている時期でもありました。当時、日本を代表する美術評論家だった河北倫明さん（故人）の家に自ら赴き、審査委員長になっていただくよう依頼し、全国規模の美術賞へと成長させる素地を整えられたのです。

「倉吉：緑の彫刻賞」に続いて、倉吉ゆかりの芸術家2人の名前を冠した「前田寛治大賞」と「菅楯彦大賞」が始まり、どちらも高い芸術性を保持する美術賞として全国に名をはせています。

牧田さんは、本当に芸術好きで博物館にもよく来られていました。自分が市長在任中に生み出した文化を育む風潮を愛し、見届けたいという強い思いが感じられました。抹茶で一服し、私たちと和やかに談話をすることもよくありました。私にとってもとても楽しい時間でした。

市長としての牧田さんは、まさに「現場主義」の人でした。真っ先に現場に駆け付け、状況を確認していました。時には職員より早く到着していたこともあったほどです。

あと、「中央官公庁への陳情は、一番最後に行くのがいい」とよく言っておられました。「陳情と言うと、誰もがわれ先に行こうとするけど、一番最初でもない限り相手の印象に残らない。むしろ後ろに気兼ねせず、ゆっくり対応してもらえる最後が一番印象を残せる」と。さまざまな方法で、倉吉の名を全国に印象づけようという知恵を出すことに努力を惜しまない人でした。

◀第7回 菅楯彦大賞「花泥棒」（岩田壮平／平成20年）
最近のトイエンナーレ受賞作品。
昨年10月には、天皇皇后両陛下も倉吉博物館で鑑賞されました。

▲倉文協連合会のお茶席にて（平成１８年）

▲淡交会全国総会で会員増強の表彰（平成１１年）

▲「トイレからのまちづくり」による「さわやかトイレ」

人の気持ちをよく読み、人間関係に生かす

倉吉文化団体協議会会長
計羽 孝之さん

倉吉文化団体協議会(倉文協)は、昭和56年5月に設立されました。

それまで倉吉は、「文化のまち」という割には、さまざまな文化活動を統括する文化団体がありませんでした。そこで、当時の市の企画担当者や関係者が相談して倉文協の組織をつくりあげました。

牧田さんは、当時、茶道裏千家の倉吉支部長として倉文協の活動に携わっておられました。市長に在任中の平成元年春から17年間にわたって会長を務め、特に市長退任後は、ほとんど倉文協の活動に専念し、会の運営を引っ張っていただきました。

私も、設立当初より、倉文協の副会長を務め、二大事業の一つ「アザレアのまち音楽祭」などを手掛けるなどして、牧田さんの仕事ぶりをそばで見て、さまざまな教えを受けました。

特にすごいと思ったのは、20年程前、倉文協が200万円弱の赤字を抱えた時のことです。牧田さんは先頭に立って経営改革に乗り出しました。まず、徹底的なマネジメント意識で経営診断を行い、収入と支出のバランスの悪さに着眼し、支出の抑制を図りました。「アザレアのまち音楽祭」のコンセプトも、このとき確立しました。それまで、中央ときには海外から演奏家を呼んでいたのですが、これを見直し、地元の優れた演奏家の発掘と支援を行い、地域芸術文化の活性化に寄与するよう方針転換しました。スポンサーの企業や団体に、よく趣旨をくんでいただいたこともあり、住民自らが文化を育み、根付かせる地域社会を醸成する機運が高まりました。

また、牧田さんは、会費や寄附金、入場料といった収入と、ギャランティや各種経費といった支出を入念に検討し、適正なバランスを探り当てる、そういう市場心理を読むのに非常に長けている人でした。ですから、「赤字を解消するには3年はかかる」という周囲の予想を大幅に上回り、なんと1年で黒字運営にしたんです。牧田さんというと、文化振興の業績ばかりが注目されがちですが、そういった優れた経営センスも持っておられました。

あと非常におしゃれで、ほめ上手な人でした。「あんたは、ほんに仕事が早くてええわ」なんて牧田さんに言われると、うれしくて、「よし、もっとやってやろう」と思いましたね。

人の心をよく読み、それを上手に人間関係に生かせる人でした。

茶道の精神に通じ、洗練された文化人

茶道裏千家淡交会
倉吉支部参与
山本 宗朝さん

茶道裏千家には、全国の関係団体を宗家直轄団体としてまとめる「淡交会」という会が組織されています。牧田さんは、淡交会倉吉支部長を昭和53年から平成14年まで、24年間務められました。当時、会員は600人を数え、教室の生徒は1,500人を超える大所帯で、私も12年間幹事長を務め、牧田さんと一緒に会運営のお世話をしてきました。

しかも、牧田さんは、全国総本部の総会の副議長にも2年間身を置き、国内だけでなく海外の会合にも積極的に出席しておられました。裏千家の総本部といえば、多くの著名な政財界人や芸術家が参加しておられ、そのような中に牧田さんがおられるというのは、倉吉市の者としても、非常に鼻が高い思いがしました。

「お茶」というのは、非常に奥深いものです。水を運び、炭(薪)をとり、湯を沸かし、茶を立てるという行為は陰陽五行の教えにものっとり、茶席に禅語の掛け軸がかけられるなど「禅」の心にも縁が深いものです。生命の根源を表すものともいえ、日常生活に活力を与えてくれます。私の周囲では老若男女問わず、「お茶」をたしなんで生き生きと生活していらっしゃる方ばかりです。本当に素晴らしいことだと思っています。

また、茶道の根底にあるのは、人間関係を大切にし、謙虚に感謝する精神です。「濃茶」では、一つの茶碗のお茶を複数の客でいただきます。そこには、「お先に」、「どうぞ」とすすめあい、「頂戴します」、「ごちそうさまでした」というあいさつがあります。お互いの心を思い合い、伝えあう言葉や所作なのです。それは、社会の本来あるべき姿の凝縮だと思います。

牧田さんは、そういった、「お茶の本質」というものと、その本質は茶道だけでなくすべての文化に通じるものだということもきちんと理解しておられました。

そうやって文化を大切にされる方だったからこそ、文化は交流を生み、地域を発展させるということを信条にしておられました。物事の本質を見抜く、洗練された、本当の文化人でした。何事にも熱心に耳を傾け、私たちが何かを企画すると、積極的に後押ししてくださったものです。11月13日(日)に開催した、倉吉市初の「市民大茶会」もきっと喜んでくださったと思います。